

P-257 子宮体癌に対する傍大動脈リンパ節(PAN)転移症例に対する長期予後改善の検討
—術後補助化学療法の有用性について—

国立病院四国がんセンター

日浦昌道, 野河孝充, 川上洋介, 別府理子,
横山 隆, 千葉 丈

[目的] 子宮体癌の傍大動脈リンパ節(PAN)郭清は進行期の確定や病巣の切除を含め、術後追加治療の選択に極めて重要である。PAN転移症例に対する長期予後改善策のための術後補助化学療法の有用性について検討する。

[方法] 対象は1986年～1995年に診断治療した子宮体癌132例(I a期: 26例, I b期:44例, I c期:14例, II a期:4例, II b期:13例, III a期:14例, III b期:1例, III c期:13例, IV b期:3例)で、術式には準広汎性子宮全摘術、両側付属器切除術、骨盤・傍大動脈リンパ節郭清を施行した。組織型は類内膜腺癌G1:57例, G2:51例, G3:3例, 腺扁平上皮癌:12例, 腺棘細胞癌:6例, 漿液性腺癌:2例, 明細胞腺癌:1例である。G2, G3, 腺扁平上皮癌, 漿液性腺癌, 明細胞腺癌, 筋層浸潤 $\geq 1/2$, 頸部進展, 脈管侵襲, 子宮外進展例を術後補助化学療法の適応とした。CAP療法を3コース以上(PAN転移症例には周期的化学療法追加)施行し、進行期別およびPAN転移症例の長期予後を検討した。

[成績] I, II, III, IV期における各5生率は98%, 92%, 73%, 0%, 10生率は91%, 92%, 65%, 0%であった。PAN転移陰性群と陽性群の5生率は90%, 73%, 10生率は83%, 73%を示した。PAN陽性例は12/132(9%)で、組織型別では, G1:7/57(12%), G2: 5/51(10%), 腺扁平上皮癌:4/12(33%), 漿液性腺癌: 1/2(50%), 明細胞腺癌: 1/1(100%)に認められた。

[結論] 子宮体癌に対する術後補助化学療法は有用で, surgical stagingによって適応を決定すべきである。腺扁平上皮癌, 漿液性腺癌, 明細胞腺癌はPAN転移率が高く, PAN転移例には周期的化学療法で長期予後の改善が認められた。

P-258 無茎性筋腫の子宮鏡下切除術の検討
—有茎性筋腫との比較—

秋田赤十字病院

田中耕平、高木偉博、七里和良、藤盛亮寿

[目的] 子宮内腔に茎のない無茎性筋腫は筋層内に筋腫が埋没しているため有茎性筋腫と比較して子宮鏡下切除術は子宮穿孔、水中毒等の危険性がある。当科にて施行した症例にて無茎性筋腫の切除の危険性およびその効果について検討した。

[方法] 当科にて、手術を同意し子宮鏡下手術した子宮筋腫症例89例中、筋腫を切除した57例(A群:無茎性筋腫34例、B群:有茎性筋腫23例)について主訴、子宮の大きさ、子宮腺筋症、筋層内筋腫等子宮内他病変の有無、手術時間、灌流液量および自覚症状の改善等につき検討した。[成績] 過多月経がA群に27例(79.4%)、B群に17例(73.9%)認められた。A群すべて、およびB群22例の子宮の大きさは鵝卵大までであった。A群、B群の筋腫長径は $28.7 \pm 11.0\text{mm}$ (5-65mm)、 $28.7 \pm 8.8\text{mm}$ (15-45mm)で切除筋腫重量はそれぞれ $12.8 \pm 7.5\text{g}$ (1-28g)、 $10.1 \pm 9.2\text{g}$ (1-40g)で有意差はなかった。使用灌流液量はそれぞれ $6.8 \pm 3.7\text{L}$ 、 $5.2 \pm 4.7\text{L}$ であり有意差はなかったが手術時間が 51.9 ± 22.8 分、 39.1 ± 24.1 分であり有意にB群と比較してA群で時間を要した。A群で1例、術中低Na血症を合併したが両群で子宮穿孔等重大な合併症は起こらなかった。子宮腺筋症はA群、B群でそれぞれ4例(11.8%)、1例(4.3%)、筋層内筋腫、漿膜下筋腫等の合併は18例(52.9%)、8例(34.8%)あったが、術後自覚症状の改善例はそれぞれ30例、20例であり、評価可能症例中それぞれ93.8%、95.2%に効果があった。[結論] 無茎性筋腫症例は有茎性筋腫症例と比較して切除時間を要するが、同様に子宮鏡下に安全に切除可能であり、自覚症状の改善に有用であることが示唆された。